裏路地探険

その昔、数百石もの塩を産出した浜 北前船で栄え、異文化を受け入れてきた町 板塀に隠された歴史をたどる

海が見える路地／竹野町

竹野川の河口にある港から鷹野（たかの）神社、ジャジャ山公園へ向かって、竹野浜と平行するように町中を横切る路地には、真っ青な海が顔をのぞかせるいくつかのポイントがある。

竹野浜は、白砂遠浅、夏には、昔ながらの浜茶屋が建ち並び、氷水にラムネやスイカがどっぷりとつかり、どこかなつかしい光景を見せる海水浴場。毎年、約50万人の海水浴客が訪れ、路地を水着姿や素足で歩いても違和感がないような賑わいを見せるが、季節外れの通りは静かでおだやかな表情を見せる。

路地の吹き溜まりには砂がたまり、海と密着した町並みは、多くの家が潮風をさえぎるように、杉の表面に焦げ目をつけた焼き板で覆われている。剥がれ落ちた焦げ目の跡が、海から真っ直ぐに向かって吹いてくる潮風の強さを物語っている。

一見、同じように見える板壁の佇まい。しかし、その板の下には、かつて、味噌蔵、醤油蔵といわれた蔵がある。竹野は、江戸中期から明治末期にかけて、大阪から瀬戸内海、北海道へと往来した北前船で栄えた里。「竹野の大浜」と呼ばれ但馬の代表的な廻漕業の村として繁栄してきた。今も残る数々の蔵は多くの船乗りをかかえていた船主の隆盛ぶりをうかがい知ることができる。家の中には航海の安全を祈る大きな神棚が据えられ、日本各地の港から持ち帰った多くの珍しい調度品であふれていた。中には庭に灯籠を据えるなど変わった施しも残されている。

現在、海水浴客で賑わう浜辺も江戸時代は、数百石の塩を納める塩浜として、また、海岸防備の拠点という観点からも重要な地とされてきた。幕末、浦賀に黒船が来航した時も、北の要衝として警備を強化したと言われている。

このまち独特の屋号に「加賀屋」「松前屋」「備前屋」、「～右衛門」「～左衛門」などがある。多くの人々は今もその名を親しんで呼ぶ。他の地方から嫁いで来た者、移り住んできた者、あらゆるものを受け入れてきた。海の道を伝い影響を受け育まれてきた町。この町の気質はおだやかで温かい。

年に数回、海と空の境が見えなくなる日があるという。歴史をたどりながら歩いた板塀が続く入り組んだ路地の向こうに、ぬけるように青い空と深く蒼い海が顔を覗かせる。

惹かれるように浜辺へと向かう。路地の切れ目から潮風がふわっと吹き込み、次ぎの瞬間視野いっぱいに青い海が飛び込んでくる。いつもの、この町特有の海を実感する瞬間だ。

協力：竹野町

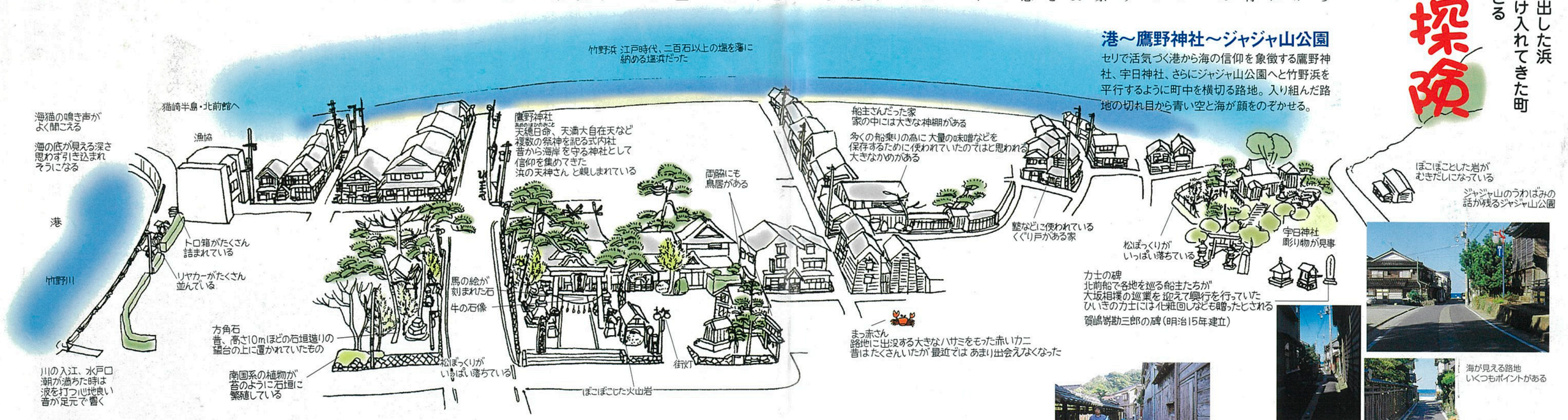
●裏路地探険隊隊員募集

10月3日(土)出石町探険

＊締切は実施日の一週間前まで、18ページに掲載のT2編集部までハガキでお申し込みください。

港～鷹野神社～ジャジャ山公園

セリで活気づく港から海の信仰を象徴する鷹野神社、宇日神社、さらにジャジャ山公園へと竹野浜を平行するように町中を横切る路地。入り組んだ路地の切れ目から青い空と海が顔をのぞかせる。

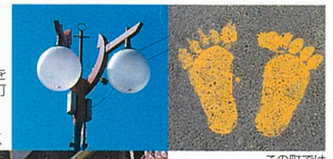


海が見える路地 いくつもポイントがある

焼き板に覆われた町並み

「この板の下も蔵です」と地元の奥さんに話を聞く探険隊

案内をしていただいた郷土史家の山田寿夫さん



竹野の文字と北前船をイメージした街灯

この町では止まれマークも裸足

潮風にさらされ焼き板の焦げ目が剥がれ落ちていく

砂や海水を洗い流す為か家の前にシャワーや蛇口のある家が多い

洗濯物を干すように魚が軒下に吊されている

鷹野神社の境内に寝そべる牛の石像

宇日神社の彫り物

但馬の情報誌T2 Vol.32／1998年7月発行より抜粋